

## 2019年1月NHK北海道地方放送番組審議会

1月のNHK北海道地方放送番組審議会は、20日(水)、NHK札幌放送局において、10人の委員が出席して開かれた。

議事に先立ち、若泉札幌局長と佐藤北見局長からあいさつがあり、議事に入った。

議事はまず、北海道スペシャル「シャーロットの北海道紀行！～イザベラ・バードの道～」をはじめとして、放送番組一般について活発に意見の交換を行った。続いて、2月の番組編成について高木放送部長から、放送番組モニター報告について中田副局長から、視聴者意向について竹本広報・事業部長から、それぞれ説明があり、会議を終了した。

### (出席委員)

委員長	丸藤 競	(函館市地域交流まちづくりセンター センター長)
副委員長	井田芙美子	((株)いただきますカンパニー 代表取締役)
委員	嘉指 博行	(北海道新聞社論説委員)
	桐生 宇優	(北雄ラッキー株式会社 代表取締役社長)
	齋藤 拓也	(北海道大学大学院メディア・コミュニケーション研究院 准教授)
	成田 正夫	(ながぬま農業協同組合 代表理事組合長)
	蛭田 亜紗子	(小説家)
	村田 博	((株)村田商店 代表取締役)
	柳谷 君子	(NPO 法人ワークフェア オホーツク若者サポートステーション総括コーディネーター)
	山下 徹也	((株)グローバル経営センター 代表取締役専務)

### (主な発言)

<北海道スペシャル「シャーロットの北海道紀行！～イザベラ・バードの道～

(総合 1月11日(金) 後8:00～8:42)について>

- イザベラ・バードが実際に旅をした函館から平取までの足跡は丁寧に説明されていたが、バードについての紹介が番組内でほとんどされなかったため、バードの人物像や北海道を旅した目的があまりわからなかった。そのため、一般的な旅番組のような印象を受けた。また、番組の終盤で出演者のシャーロット・ケイト・フォックスさんが涙したシーンがあったが、涙した背景についての説明が無かったため、唐突な印象を受け、共感できなかった。
- バードが北海道に来た当時の風景を紹介しながらバードの足跡を実際にたどる演出だったため、当時と現在を比較することができ、楽しく見る事ができた。番組の

中でところどころ紹介されたバードにゆかりのある観光スポットには実際に行ってみたいと思った。ただ、バードと直接関係ないものが番組内で紹介されたことに違和感があった。また、バードが北海道を旅した際に感じた思いを番組の中でしっかりと掘り下げられていなかったため、シャーロットさんが「イザベラ・バードの気持ちが分かった」と言って涙した理由を理解できなかった。バードが北海道を旅した理由については番組冒頭で「アイヌの人々に会いに来た」と説明されていたが、なぜアイヌの人々に会いに来たのかというところまで掘り下げて説明してほしかった。

- バードの旅の足跡を、出演者が楽しみながらたどるというバラエティー的な演出で、番組全体としては飽きずに見られたが、バードについて紹介する内容がもっとあってよかった。また、アイヌの料理に欠かせないニリンソウやサケといった食材が番組中で取り上げられていたが、アイヌの料理や食材についてはさまざまなエピソードがあるため、そうしたエピソードを番組内でも取り上げることで深みのある番組にしてほしかった。
- バードと同じ外国人の女性であるシャーロットさんが、バードの旅の足跡をたどるという演出はとても面白かった。当時、言葉も通じないような大変な状況の中でアイヌの人々に会いに行くというバードの熱意を想像することはできたが、バードがどうしてアイヌの人たちに会いたかったのか、会って目的が達成されたのか、アイヌの人たちについて書いた著述がどのように評価されたのか、そういった点をもっと知りたかった。

(NHK側)

イザベラ・バードという歴史上の人物の北海道での足跡を歴史的にたどっていくだけでは、面白さや楽しさという点が希薄になるため、「マッサン」で北海道にゆかりがあり同じ外国人女性のシャーロットさんに旅をしてもらうというバラエティー的な要素を織り交ぜて番組を構成した。そのため、イザベラ・バードという人物や、旅の目的について深掘りが足りなくなってしまったかもしれない。シャーロットさんは日本語をほとんど話せない状態で日本に来て、その頃からバードの本を読んでいたそうだ。1870年代に北海道についての情報をほとんど持ち合わせていないイギリス人女性が日本で旅をするという挑戦が、シャーロットさん自身の経験と重なり、それが番組最後の涙につながったのだと思う。こうした背景も番組の中で出せばよかった。

- もともとシャーロットさんがバードについて思い入れがあったということだが、そ

の背景を知って番組を見ると、番組から受ける印象がだいぶ変わるため、とても大事なことだったのではないかと。バードがなぜアイヌに興味を持ったのか、なぜアイヌの人たちに会いたかったのかという説明も必要だった。

- バードの旅路をシャーロットさんがたどることで、二人の外国人女性の冒険を対比してその旅路に思いをはせるというのは、よくできた企画だと思った。シャーロットさんがもともとバードに思い入れがあったというのはとてもいいエピソードなので、番組の中で取り上げてほしかった。バードの荷物のリストが紹介されていたが、ベッドなどかなり大きなものが入っていたことに驚いた。バードは実際には何人で旅をし、どういう服装でどのように荷物を運んだのかという点がとても気になったので、バードの旅をもっと具体的に想像できる仕掛けがあったほうがよかった。撮影時期はおそらく、秋の終わりごろかと思うが、紅葉が終わっていて風景が寂しく、少し残念に思った。
- バードを全く知らない人間からすると、バードがなぜ北海道に来たのかという点をもっと知りたかった。先ほどシャーロットさんがバードに対して思い入れがあったというエピソードを聞いたが、これを番組で取り上げなかったことは大変もったいないと思う。ただ、バラエティー要素のある旅番組としては、シャーロットさんの可愛らしさが魅力的で、出演者同士の掛け合いも要所要所に入っていて楽しく見ることができた。また、バードがお風呂を持って旅をしていたという話は非常に面白く、50キロある荷物をどのように運んでいたのか、西洋の女性はふだんからそういう旅をしていたのか、そのあたりも深掘りしてほしかった。
- バードの旅行記をシャーロットさんが流ちょうな英語で読み上げていたが、バードが当時の北海道の風景を見て感じたことを、同じ外国人女性であるシャーロットさんはどう感じたのか。バードの目線とシャーロットさんの目線でそれぞれどのように北海道の風景が映ったのかを見せてほしかった。140年前と変わらない風景が残っているのは北海道の財産だと番組でも触れられていたが、これからも、番組制作を通じて北海道の魅力をもっと出してほしい。
- シャーロットさんがチャーミングで、最後まで可愛らしいと思いながら見ていた。また、とても美しい英語を話すので、バードの著書を読む姿やナレーションも大変心地よく聞くことができた。バードがなぜ北海道に来たのかという説明は不十分で残念だったが、バードがどのように北海道を旅したのかという点を表現しようとする努力は伝わり、限られた時間の中では十分だったと思う。旅行時の持ち物や移動手段についての紹介や、バードが歩行するのに難渋したであろう地点を実際に見てみるなどの

描写から、当時の様子を想像することができた。ただ、シャーロットさんが番組の最後で涙した理由がわからず、唐突だと感じた。今回に限らず、この番組をなぜこのタイミングでやるのか、なぜその出演者でやるのかという理由などもしっかりと視聴者に伝え、より納得して番組を見ることができると思う。

- 外国の女性が日本を旅するという点で、今回案内役としてシャーロットさんは適任だった。バードが旅した当時の北海道がどんな状況だったのか、あるいは当時、外国の女性が日本に来ることがどれくらい珍しいことだったのか、外国を旅する人がたくさんいたのかなどの時代背景も知りたかった。また、バードが旅した日時や番組内で紹介されている当時の写真について具体的な日時の説明や記載もほしかった。

(NHK側)

イザベラ・バードは魅力的で興味深い人物だ。今後も継続して取材したい。

<放送番組一般について>

- 1月5日(土)の北海道LOVEテレビ 聖火のキセキ「北海道 岡崎朋美 聖火ランナーの奇跡に感動」(総合 前 10:25~10:50 北海道ブロック)を見た。まず、女子スキー競技において日本で初めてオリンピック出場を果たした選手を育てたのが、地方のゴム長靴製造会社だということに驚いた。また、スキークロスのピョンチャンオリンピックの代表になった選手を、子どもの頃に自宅に住まわせてまで育成した指導者の話も興味深かった。日本のスポーツは、世界と戦えるようなレベルの選手は国などからさまざまな支援を受けられるが、そのレベルに育つまでは地方の企業や個人が一生懸命無償で育てていて、その人たちの熱意で支えられているのだと感じた。また、「聖火のキセキ」というタイトルだが、「キセキ」が片仮名になっていることが少し大げさな気がした。ミラクルを伝えているのではなく聖火にまつわる人と人との関わりがテーマなので、奇をてらわないタイトルの方が内容を勘違いする人もなく、中身がもっと伝わったと思う。
- 1月11日(金)北海道クローズアップ「初対談 北島三郎×大泉洋」を見た。番組の冒頭はカメラマンと大泉洋さんの掛け合いで始まったが、他局の旅番組を意識し過ぎたのではないかと感じ、この掛け合いが必要だったのかどうか少し疑問を感じた。二人の対談からは北海道に対するととても深い愛情を感じた。道民以外の人にも郷土愛を感じてもらえる内容に仕上がっていたと思うので全国の視聴者に見てもらいたい。
- 大泉さんが北島さんからとても上手く言葉を引き出しており、北島さんの経験や考えがよく語られていて面白い番組だった。有名人同士の対談というのはそう簡単には

設定できないと思うが、北海道のことを大切にしながら活躍しているさまざまな分野の人の対談番組の制作を希望する。

- スター二人の会話の内容が化学反応を起こしていて、とても楽しい内容だった。北島さんのこれまでの経歴や実績が、知らないことも含めてはっきりわかった。美空ひばりさんに対する北島さんの思いも対談の中で語られていたが、とても感銘を受けた。私が高校生のとき「風雪ながれ旅」の舞台で雪を降らせ過ぎたことが話題になったが、番組でその映像を使用していてセンスがよいと思った。
- 番組の最後で北島さんが言った「北海道は背もたれ」というコメントはすばらしい例えだ。背もたれが付いているいすを触りながら語っていたが、ずっと心に残る表現だ。故郷を「背もたれ」と例えるのは、これまで聞いたことがなく、感銘を受けた。
- 番組の冒頭から大泉さんらしいキャラクターが出ていて、楽しく見ることができた。対談の中で一番感銘を受けたのは、北島さんが北海道を出るときに「ふるさとを捨てて東京に行った」と話していたことだ。逆に大泉さんは「北海道で仕事をしながら、東京でも仕事をしている」ということを話しており、二人の間に考え方の差はあるが、それでも北海道にしっかり根を持っていることが二人を結びつけていると感じられ感動した。また、二人が北海道の魅力を語るシーンでは、北海道が本当に好きなのだという思いがしっかり伝わってきた。また、二人がプロとしての思いを語っていたが、北島さんは今でも素人が自分の歌を歌うとき、いいところがあれば盗んでしまおうと話しており、固定観念を持たないすばらしさを感じた。
- すごく面白い番組だった。大泉さんの進行は抜群で、他の人との対談もぜひ見たいと思った。北島さんの昔話を温かく聞いていた大泉さんの様子にほのぼのとした感じになった。有名なお二人を身近に感じることもできた番組だった。
- 北島さん、大泉さんそれぞれの個性がよく出ていた。北島さん自身が番組の中で何度も「ふだんはこんなにしゃべらないけど」と言っていたが、それくらい大泉さんが北島さんの話をうまく引き出していた。番組冒頭の演出はいかにも大泉さんらしい感じがしてよかったと思う。番組の中で流れていた北島さんの昔の映像を見ると今の歌手には無い声量の大きさを改めて感じたし、番組全体を通して、今の北島さんの魅力も感じることもできた。

(NHK側)

対談番組ということで視聴者に硬い印象を与えてしまう可能性があり、ま

た若い人にも見てもらいたいと考えていたため、番組冒頭でカメラマンと大泉さんの掛け合いを取り入れた。

- 12月31日(月)の「第69回NHK紅白歌合戦」を見た。事前情報もなく久しぶりに見たが、以前のような対決スタイルからかなり脱皮し、ショーとして完全に成立しており、改めてNHKの底力を目の当たりにした。米津玄師さんの存在感に驚き、すごい歌手が出てきたと思った。
- あまり期待せずに見ていたが、近年にない「神回」だったと思う。総合司会の内村光良さんの司会ぶり、NHKや他局のキャラクターでも登場するなど、彼のおかげで「紅白」はかなりよくなっている。一方で、直前のPR番組については内容に乏しく考え直した方がよい。
- 1月8日(火)の「北海道ライブ！大泉洋が贈る応援ソングばかりのスーパーステージ」(総合 後 7:30~8:15)を見た。もともと盛りだくさんの内容だった北海道で放送したものを全国版に編集していたが、番組のコアの部分や全体の流れを変えずにブラッシュアップされていて、見やすくなっていた。複数曲歌った歌手の歌を一部カットしてダイジェストにするのは歌番組としては大胆だったが、北海道の復興がテーマの番組なので、この形が正解なのだと思う。温かく前向きなエネルギーに満ちた、いい番組だった。
- 全国で放送するにあたり、どのように編集するのかと思っていたが、歌をどんどんカットする一方、出演者と被災地の人々との繋がりが強調されており、全国放送の形としてよかったと思う。
- 12月16日(日)のBS1スペシャル「再出発の町 少年と町の人たちの8か月」(BS1 前 0:00~0:49)を見た。これは「北海道クローズアップ」で取り上げたものに追加で取材した内容を加えたものだが、継続的に取材しているからこそその新たなエピソードが加わっていて、更生の難しさや、更生施設で生活する少年たちと町の人々との関わりなど、いろいろな意味で深く考えさせられる番組になっていた。
- 12月26日(水)の「米子が生んだ心の経済学者～宇沢弘文が遺(のこ)したもの～」(BS1 後 9:00~9:43)を見た。人々が豊かに暮らすにはどうしたらいいかということを考え続けた学者と、亡くなった学者の思いを受け継ぐ出身地の人たちが紹介されていた。社会における格差が大きくなった平成最後の暮れにふさわしい内容だと思って見ていたが、この番組を制作したのは鳥取県米子市のケーブルテレビ局だと

いうことに驚いた。普通なら米子市のケーブルテレビ局の番組を見る機会などほとんど無いため、とてもいい番組を見させてもらったと思っている。ケーブルテレビ局側も、いい番組を制作したらNHKが全国に放送してくれる可能性があるというのは刺激になると思う。今後もこうした取り組みを続けてほしい。

- 1月2日(水)特集オーディオドラマ「サウンドミュージカル 雪色オルゴール」(FM 前0:00~1:00)を「らじる★らじる」で聴いた。室蘭は、石炭と港と鉄道の歴史を観光資源にしようという取り組みをしている中なので、石炭鉱石の妖精が話をつづっていくという内容はタイムリーで面白かった。映像が出てくるのも分かりやすくてよいが、ラジオドラマは自分の頭の中でどのようにでもイメージを構築することができるので、改めていいものだなと思った。最近ではラジオをあまり聴いていなかったが、この番組をきっかけに改めてラジオを聴いていきたいと思った。
- 「NHKニュース7」についてだが、最近では柔らかいネタを取り扱うことが多く、バラエティーのように感じてしまうことがある。もっと厳しく切り込むようなニュースをお願いしたい。

NHK札幌放送局  
番組審議会事務局